

明治期以降曹洞宗人物誌（五）

川口 高風

はじめに

本稿は「愛知学院大学教養部紀要」第五十八巻第四号（平成二十三年三月）に所収の拙稿「明治期以降曹洞宗人物誌（四）」の続編である。全項の人物誌が完成した時は『近・現代曹洞宗人名辞典』と題して刊行する予定で、一日も早い完成をめざし精進している。

凡例

〔見出し項目〕

- 一、収録人物は明治期以降の顕著な業績を残した人物で、その出典は「明教新誌」「宗報」「曹洞宗報」を中心に各種雑誌や著作などから採取した。
- 二、見出しの人名は当時用いた旧漢字とした。事歴の本文は新字体を用いたが、旧字体を使用したものもある。
- 三、見出しの項目はかな見出しを太字で示し、次に漢字を掲げた。

- 四、かな見出し項目は姓と名の間にダッシュを挿入して読みやすくした。

〔見出し項目の配列〕

- 一、配列は五十音順の予定であったが、「い」以降は完成した原稿の順序とした。そのため本稿では「え」「け」「そ」「ち」「ぬ」「ね」「ら」「り」「ろ」の項をとりあげた。
- 二、同音同字の漢字項目は時代順（没年順）に配列した。
- 三、同音異字の漢字項目は第一字目の画数の少ないものからの順とした。また、第一字目が同画数の時は第二字以降の画数の少ないものから配列した。

〔本文の記述とその順序〕

- 一、本文の記述は敬語、敬称の使用を避けた。
- 二、収録にあたっては居住地、号、字、生年月日、父母、誕生地、受業師、本師、学歴、僧堂安居歴、宗門役職歴、社会的職歴、著作類、示寂（没）年月日、行年、参考文献の順とした。不明な場合は記していない。
- 三、本文は基本的に、編者が直接、居住地へ問い合わせを行った返書にもとづいて執筆した。それ以外に参考とした文献は末尾に掲げた。
- 四、伝記中の元号の一番最初（初出）に西暦を入れた。ただし、伝記中の生没年には西暦を入れない。
- 五、寺院の所在地は、平成の大合併による新市町村名への変更を行っていないものもある。
- 六、居住地は歴住の順序通りでないものもあり、何世か不明な場合は記していない。

え

えがわーたいぜん 江川太禰

明治二十四年(一八九二)ー昭和四十五年(一九七〇)

北杜市清光寺、瀬戸市宝泉寺。明治二十四年二月十日に滋賀県彦根市に生まれた。本籍は名古屋市中区徳川町。本師は大野圀山。大正三年(一九一四)曹洞宗大学を卒業した。宗務院書記、總持寺常在布教師、

岡本山巡回布教師、報恩会講師、戦時特別布教師、特派布教師、宗会議員、東海地区布教管理、愛知県第一宗務所長、總持寺監院などを務めた。著作に『松月』がある。昭和四十五年十月二十一日に享年八十歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』〔傘松〕第三三〇号)

えぐちーこううん 江口耕雲

明治二十六年(一八九三)ー昭和五十年(一九七五)

名古屋市法輪寺十九世、名古屋市了玄院六

世。号は月心。明治二十六年十月二日に岐阜市で生まれる。受業師は藤好全提、本師は加藤絶耕。熊沢泰禪に参随しており、明治四十二年(一九〇九)より大正二年(一九一三)まで敦賀市永建寺に安居する。愛

知県第一宗務所長、愛知県祖門会会長、守山市仏教会会長、保護司、民生委員などを務めた。昭和五十年六月二十四日に世寿八十二歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』〔傘松〕第三八三号)

えぐちーほうかく 江口法寛

ー昭和十六年(一九四一)

鶴岡市正法寺四十二世、鶴岡市龍藏寺三十世、鶴岡市福生庵開山。号は大圓、鶴岡市に生まれる。受業師、本師は善宝寺三十四世水野禪法。慶応義塾大学出身。善宝寺三十五世法運禪教が住持の時、執事に就き、總持寺御移東に際し、鶴岡市の総穩寺の本堂と侍局を鶴見へ移したが、その実質的推進力となって尽力した。昭和十六年三月三日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

えぐまーけんぼう 江熊賢芳

弘化四年(一八四七)ー大正十二年(一九二三)

鴻巣市龍光寺二十一世。号は梅綻。弘化四年八月二十八日に大分県宇佐郡江熊村の江熊兼右衛門の三男として生まれる。明治十四年(一八八一)十月二十二日に、東京府芝区二本榎町の円福寺より龍光寺へ移る。大正十二年十二月二十七日に示寂した。

えこしーこうみょう 江越光明

大正十五年(一九二六)ー昭和六十三年(一九八八)

福岡県久留米市千栄寺二十四世。号は禅哲。大正十五年二月二十八日に久留米市草野町吉木の古賀家の五男に生まれる。受業師、本師は古賀無能。本渡市明徳寺の安田祖龍に参随する。昭和十八年三月一日に久留米市旧制南筑中学校を卒業、福岡県宗務所庶務主事、福岡県宗務所長、宗議會議員、永平寺二祖国師七百回大遠忌焼香師、少年補導員などを務めた。また、本堂、鐘楼堂などを建立し寺内を整備した。昭和六

十三年四月二日に世寿六十三歳で示寂した。

えざぎーせつこう 江崎接航

天保九年(一八三八)―明治四十年(一九〇七)

名古屋市林泉寺五世、名古屋市福寿院十二世、対馬市国分寺三十二世。号は等一、または鈎庵。天保九年六月十五日に尾張に生まれる。俗姓は杉村。受業師、本師は黄龍寺の鼎三。名古屋市光明院や東京都喜運寺に安居する。安政三年(一八五六)より同五年迄、吉祥寺の学寮で修学し、同六年二月より文久元年(一八六一)一月迄、高伝寺三十八世の蘿溪肩菴に随侍して参禅した。明治期になると、同五年(一八七二)八月には、三条の教則主意専布のため、名古屋を担当する権説教師を拜命し、翌六年七月十日、教導職の十二級試補に命ぜられ、さらに、十一月二十七日には名古屋市林泉寺五世に任職した。同七年には愛知県六宗合議所の禅宗部署副幹事及び講習従事に任命され、八月十八日には権少講義に昇

格している。なお、同年、大光院内にある愛知県下曹洞宗中教院の庶務に就き、九月には中書記にも任命された。師は隷書を得意としており、大遠忌中の配役、標牌、建札など、すべて師の隷書であったといわれ、「セツコフ」調の三筆の一人と称された。同四十年一月に『大般若経』全巻を国分寺の什物となした。明治四十年二月二十三日に七十歳で示寂した。(『洞上高僧月旦』『白鳥鼎三和尚研究』)

えざぎーりょうてん 江崎亮天

万延元年(一八六〇)―昭和三年(一九二八)

瀬戸市雲興寺三十九世。号は普照。万延元年、現在の名古屋市南区呼続町山崎の江崎仙右衛門の四男に生まれた。受業師及び本師は光琳得明。文久三年(一八六三)雲興寺三十八世光琳得明に就いて得度し、明治二十六年(一八九三)三月に曹洞宗大学林を卒業。岐阜中学林の教師となる。同三十三年五月には光琳得明の室に入り嗣法した。天台の碩学姫宮大円の講席にも列し、

天台宗や臨済宗の名僧に随侍した。講義を筆録した『大乘起信論義記聴講義』、『唯識論述記』がある。当地の中島氏が絶家となるので、本師のすすめにより江崎姓より中島姓に改めた。雲興寺三十九世に就き、大正十五年(一九二六)三月三日には緋衣借衣被著が特許され、昭和三年二月二日に尿毒症にかかり、世寿五十九歳で示寂した。(『雲興寺史』)

えざしーてつどう 江刺哲道

―昭和四年(一九二九)

宮古市瑞雲寺二十二世、岩手県二戸郡地藏寺十九世、盛岡市報恩寺。号は大安。盛岡市大清水の江刺笛遊の七男に生まれる。受業師は智峯(福蔵寺二十五世)、本師は哲明(仁叟寺)。明治六年(一八七三)九月に二戸郡田山村の地藏寺に首先任職する。二十二年旧十月二十七日に瑞雲寺へ任職し石垣や石壇を完成した。また、二十八年六月には観音堂を新築したが、三十二年七月十二日に報恩寺へ移住した。四十年一月十五日には瑞雲寺へ戻り再住し、大正八年

(二九一九) 三月には自ら戒師となって授戒会を開いたが、九月十二日には退休し、昭和四年四月十日に七十九歳で示寂した。(世代帳)

えざわーのうぐ 江澤能求

大正七年(一九一八)―昭和六十三年(二九八八)

山陽小野田市洞玄寺二十世、下関市笑山寺二十六世。号は大心。大正七年一月二十七日にアメリカハワイ島ヒロ市で生まれた。本師は山崎金龍。駒沢大学仏教学部を卒業後、山口県宗務所長、大本山永平寺地方副監院、梅花講、参禅会、社会教育委員、民生委員、保護司、文化財審議委員、高校講師など地元の要職を務めている。『闇愚』、『山陽史話』一、二、『白雲去来集』などの著作がある。昭和六十三年六月二十八日に示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

えざわーはくどう 江澤白道

明治十七年(一八八四)―昭和六年(一九三一)

山陽小野田市洞玄寺十九世、ハワイ・ヒロ市大正寺開山。号は悟山。明治十七年十二月一日に山口県厚狭郡厚西村郡村の渡辺祥藏の四男に生まれる。受業師、本師は江澤郭汪。明治三十二年(一九九九)には佐波郡の天徳寺、三十三年から三十五年迄は瑞応寺認可僧堂に安居する。四十年には曹洞宗第四中学林を卒業し、大正二年(一九一三)に曹洞宗大学を卒業した。海外開教師、ハワイ島ヒロ市の曹洞宗仮布教所主任、仏教少年教会、山口耕道会師家などを務める。昭和六年六月十日に四十八歳で示寂した。(『白雲去来集』)

えとうーそくおう 衛藤即應

明治十五年(一八八二)―昭和三十三年(二九五八)

岩国市大応寺十四世、兵庫県美方郡安泰寺四世。号は不喚、不呼。明治十五年一月三日に大分県宇佐郡駅館村に生まれる。受業師は雲栖寺の雪庵洞明、本師は心月院の弘津説三。明治三十七年(一九〇四)七月に第四中学林を卒業し、四十年八月に永平寺

で転衣した後、大応寺に住職する。四十二年には曹洞宗大学を卒業、内地留学生として京都帝国大学文科専科に入学して印度哲学を専攻した。四十五年に卒業した後、曹洞宗第一中学林教授と曹洞宗大学教授となり、大正十年(一九二二)より十三年迄、英、独、仏に留学し、昭和三年(一九二八)には京都市の安泰寺(現在、兵庫県美方郡新温泉町)に住職した。昭和二十八年より駒沢大学総長となり、曹洞宗宗学研究所、曹洞宗教化研修所の創建に努めた。駒沢大学内には、学生のための道憲寮を開いた。岩波文庫本の校注『正法眼蔵』三巻、『大乘起信論講義』、『正法眼蔵序説』、『道元禅師と現代』、『国訳一切経』所収の『華嚴経』の国訳、『宗祖としての道元禅師』などの著作がある。昭和三十三年十月十三日に世寿七十一歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『曹洞宗人名辞典』『傘松』第二六一号、『禅学大辞典』)

えにしーほうしゅう 江西芳洲

―明治三十七年(一九〇四)

長崎市光雲寺二十四世、長崎市菩提寺二十六世。号は龍海。本師は天外青雲。明治十五年（一八九二）三月十九日、畔上椋仙が總持寺の分離を宣言したが、長崎県の曹洞宗務支局の取締として非分離を主張した。明治三十七年二月十日に示寂しており、翌月十日に菩提寺で本葬が行われた。（『洞上高僧月旦』）

えんどうーぶつげん 遠藤佛眼

安政五年（一八五六）ー昭和十四年（一九三九）

山形県西置賜郡源居寺三十四世、山形県西置賜郡観音寺二十七世、宮城県柴田郡龍雲寺二十九世、山形県西置賜郡千眼寺二十八世、山形県西置賜郡豊川村の根沢寺、南置賜郡桐原寺、同郡普濟寺などにも住持した。号は智光。安政五年九月十五日に山形県西置賜郡飯豊町高峰の遠藤友次の長男に生まれる。受業師、本師は鈴木仏山。明治八年より十年五月迄、米沢の春日館に入り漢籍を学ぶ。明治十三年に曹洞宗専門本校に入り、同十七年に卒業する。郷里に帰り

住職として寺門を復興している。飛騨国専門支校助教師、山形県第二支局常置委員兼専門支校学監、奥羽六県聯合会議員、宗会議員、米沢分監監獄教誨師、山形中学林学監、宗務取締、両本山布教師として各地に巡教する。大正三年（一九一四）には宗議会議員に特選され、その他、管内布教師、柴田仏教各宗協会展教師として地方のために尽力した。明治二十二年には曹洞宗有志会を作り、足立普明とともに宗粋社を起して「第一義」を発刊した。ついで同盟会に参加して「如是」の刊行に尽力している。昭和十四年三月二十八日に示寂した。（『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『宮城県寺院大総覧』）

えんどうーれいよう 遠藤靈羊

明治三十六年（一九〇三）ー昭和五十九年（一九八四）

宮古市慈眼寺住職、盛岡市永祥院住職。明治三十六年五月十六日に盛岡市仁王町に生まれる。受業師、本師は遠藤州山。大正八年（一九一九）に盛岡中学に入学、十三年

に第二中学林を卒業、昭和二年（一九二七）に東洋大学文学化学科を卒業した後、伊達市興国寺専門僧堂、總持寺に安居した。昭和十八年に慈眼寺住職、二十一年に永祥院住職、慈眼寺を兼務する。昭和二十四年には宗会議員に当選し、教育部長、財務部長、教化部長などを歴任し、昭和五十九年七月三十一日に世寿八十一歳で示寂した。（『曹洞宗現勢要覧』『洞門龍象要覧』『傘松』第四九二号）

け

げつやーかいあん 月夜戒庵

ー明治三十七年（一九〇四）

村上市妙童寺二十四世、村上市諸上寺二十五世。号は祖光。新潟県岩船郡三面村の小池善九郎家に生まれる。本師は黙庵独照。田村孝全や石栗光忍らが隨身している。授戒会の戒師を八回務めており、明治三十七年十月十一日に諸上寺において世寿八十歳

で示叙した。

けみーせいおう 毛見静應

明治四十一年(一九〇八)ー平成八年

(一九九六)

柏崎市広濟寺二十七世、上越市光榮寺、柏崎市普伝院二十四世。明治四十一年五月十七日に新潟県西蒲原郡中野小屋村に生まれる。最初の俗姓は野村であったが、毛見と改める。受業師は吉田太応、本師は毛見珍

牛。昭和二年(一九二七)に駒沢大学専門

部二年を修了し、四年に日本大学附属東京

高等獣医学部に編入して、六年に卒業す

る。七年より顕聖寺僧堂に安居する。祖門

会県副会長、北陸管区布教師、方面委員、

民生委員、司法保護司、社会教育委員など

を務めた。平成八年五月六日に示叙した。

(『洞門龍象要覽』『曹洞宗現勢要覽』)

げんばーそげん 玄番祖元

慶応元年(一八六五)ー昭和二十一年

(一九四六)

佐野市普門寺二十世、糸魚川市双源寺十七

世。号は観応。慶応元年に新潟県中頸城郡

飯田村に生まれる。明治四十二、三年(一

九〇九、一〇)頃に双源寺より普門寺に転

住している。昭和二十一年一月三十日に示

叙した。

けんりーしゅうえん 見理秀圓

天保五年(一八三四)ー明治四十二年

(一九〇九)

東根市養源寺三十一世、東根市東陽寺開

山、東根市自牧寺十七世。号は如山。天保

五年二月十七日に山形県北村山郡川原子村

の原田佐五兵衛の次男に生まれる。受業

師、本師は見理秀山。明治十五年(一八八

二)暴風で倒壊した東根市光専寺(浄土真

宗)の山門を買い取り、現在地に設立して

従来の山門を末寺の秀重院に建てた。寺の

正面や山門両側の石垣を構築し、庭内に大

石を据えて宝篋印塔を建てた。十九年には

観音堂奥の院を増築し、二十七年より東通

三十三観音の第一番霊場とした。その他、

十六羅漢や法器、仏具を設備している。明

治四十二年六月二十二日に示叙した。

けんりーしゅうごう 見理周剛

明治二十四年(一八九一)ー昭和五十六

年(一九八一)

東根市養源寺三十三世、東根市秀重院二十

世。明治二十四年十一月十三日に生まれ

る。受業師は原田賢孝、本師は福岡県八女

郡の大聖寺の神山素猷。明治四十五年(一

九一二)に曹洞第四中学林、大正七年(一

九一八)に曹洞宗大学を卒業。同年より横

浜市本覚寺僧堂に安居しており、准師家を

拜命している。管内布教師、両本山巡回布

教師、昭和二年(一九二七)一月に山形県

認可第三禅林を共同設置して開単する。同

准師家、同禅林長にも就いている。二十一

年二月より東根仏教同和会会長、三十九年

八月より山形県祖門会会長、山形県方面委

員、社会教育委員、司法保護委員なども務

めている。著作は見理哲圓の漢詩集『禅余

の吟』がある。昭和五十六年六月十五日に

九十歳で示叙した。(『洞門龍象要覽』)

けんりーてつえん 見理哲圓

安政四年(一八五七)ー昭和五年(一九

三〇)

東根市養源寺三十二世、山形県最上郡宝円寺十九世。号は月光。安政四年十二月二十日に山形県北村山郡東郷村の森谷文治の二男に生まれる。受業師、本師は見理秀圓。

畔上棟仙に参随し、明治十年(一八七七)より十三年八月まで一関市東安寺の青山鶴道に随侍している。十四年四月に曹洞宗専門本校に掛籍して卒業後、十七年に曹洞宗大学を卒業した。十七年四月より十八年四月まで両本山に安居しており、十八年十二月に宝円寺十九世として首先住職した。四十二年十一月に養源寺に昇住しており、山形宗務所支局監事、宗務所長、布教部委員長、東根各宗連合仏教同和会長などを歴任した。漢詩集『哲圓和尚禅餘之吟』が昭和十四年(一九三九)に刊行されている。昭和五年四月二十四日に七十四歳で示寂した。(『當寺世代簿』『哲圓和尚禅餘之吟』『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』)

そ

そうーぜんみょう 宗全明

ー 明治三十一年(一八九八)

茨城県猿島郡東昌寺三十七世、下妻市正法寺二十世、常総市真光院十六世、常総市興正寺十九世。号は透閑。本師は東昌寺三十五世の天産宗龍。明治三十一年一月二十二日に示寂した。

そうみーしゅうほう 総見宗鳳

ー 明治十七年(一八八四)ー昭和四十一年

(二九六六)

安中市長伝寺、魚沼市林泉庵三十三世。号は瑞巖。明治十七年五月十七日に石川県鹿島郡七尾町の高田権左衛門の三男に生まれる。本師は真鍋魯宥。大正五年(一九一六)に長伝寺に住職し、昭和二十四年(一九四九)には林泉庵に住職して鐘樓堂を再建した。昭和四十一年八月十三日に示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

そえじまーによせん 副島如箭

ー 昭和三十年(一九五五)

北見市白麟寺三世中興。号は一透。佐賀県杵島郡有明町の法泉家に生まれる。東京哲学館を卒業し、永平寺に七年間安居して森田悟由に参随した。大正四年(一九一五)九月に大本山特命により白麟寺に赴任し開創する。その後、本堂、位牌堂、庫院、開山堂などを建立し、十九年四月には両本山の任命により中南北支、満蒙、朝鮮軍隊を慰問し、各地の戦死者を追善供養する。昭和三十年二月十二日に世寿七十五歳で示寂した。

そがーこうけん 曾我孝顕

ー 大正四年(一九一五)

山口市瑠璃光寺四十一世、山口市法田寺十七世、山口市国昌寺開山。号は卍順。山口県大島郡地家屋に生まれる。明治二十二年(一八八九)に法田寺より入寺したが、後に姓を鈴木にかえていた。大正四年六月八日に示寂した。(『歴住世代帳』)

そがーとくきょう 蘇我徳教

ー昭和三年(一九二八)

沼田市舒林寺三十二世、富岡市最興寺三十四世。号は契宗。受業師は大仏輔教、本師は大旨覚門。曹洞宗務支局取締役、支部委員長、群馬県第二宗務所長を務め、管内寺院を統率し各宗と対峙した県下教界の巨頭である。昭和三年三月十二日に示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『舒林寺史』)

そこうーしんおう 素光真應

ー明治三十年(一八九七)

三田市正観寺十六世、鳥取県西伯郡退休寺。明治十五年(一八八二)に正観寺の本堂を再建した。二十七年に退休寺へ転住し、明治三十年八月二日に四十五歳で示寂した。(『明教新誌』第一二三号、第一四一六号)

そめがわーせいげん 染川齊源

明治四年(一八七二)ー昭和十六年(一

九四一)

鹿島市龍源寺三十世、鹿島市宝聚寺七世、

佐賀市宗源院十八世。号は退歩。明治四年

九月五日に佐賀県藤津郡七浦村の染川久喜

志の次男に生まれる。受業師、本師は染川

察道。明治十七年(一八八四)三月に佐賀

県曹洞宗専門支校に入学し、卒業して二十

一年九月には藍田塾に入って漢学を学び、

同地の英語学校にも通学した。二十三年九

月に曹洞宗大学林に入学し、二十七年四月

に卒業した。四十一年九月には教導講習院

に入り、翌年六月に卒業した。九州聯合中

学林学監、教授を務めた後、台湾布教師と

なり布教や総督府嘱託教誨師などを務め

た。帰国後は内地の布教に尽力し、宗門革

正を唱えて議論して「九州の壮士」とも称

せられた。昭和十六年一月八日に示寂し

た。(『曹洞宗名鑑』)

ち

ちいわーしゅうほう 千巖秀邦

ー昭和九年(一九三四)

京丹後市太慶寺八世、京丹後市龍淵寺十六

世、京丹後市西方寺十三世、京丹後市常德

寺十九世、京丹後市正徳院二十四世、京都

府与謝郡玉林寺五世。号は碩雄。兵庫県神

崎郡寺前村の小岩秀吉の三男に生まれる。

受業師、本師は臺山邦充。永平寺に安居。

昭和九年十二月一日に九十五歳で示寂し

た。(『法運伝燈系譜大鑑』、「明教新誌」第

一五三〇号)

ちくまーぜみよう 筑摩是明

明治十七年(一八八四)ー昭和五十一年

(一九七六)

京都市永林寺二十六世、南丹市宝林寺、関

市延寿寺、京都市慈眼寺。号は光統。明治

十七年二月二日に大阪市西区西九条町下之

町に生まれる。受業師、本師は吉川義道。

明治三十七年四月から四十五年三月まで總

持寺に安居、昭和十三年（一九三八）四月から十五年三月まで覚王山日暹寺僧堂に安居。特派布教師を務めた。昭和五十一年十二月十一日に九十二歳で示寂した。（『洞門龍象要覽』）

ちだーかつゆう 千田活勇

明治三十六年（一九〇三）ー昭和五十一年（一九七六）

伊勢原市石雲寺二十六世。明治三十六年八月十八日に秋田県南秋田郡面潟村に生まれる。本師は前田慧尹。世田谷中学校中退、最乗寺僧堂に安居。朝鮮慶尚北道榮州郡曹洞宗布教所新設榮州駐在布教師、神奈川県仏教会伊勢原町高部屋支部長、社会教育委員、民生委員、中郡里親曹交会幹事などを務めた。昭和五十一年十月五日に七十三歳で示寂した。（『洞門龍象要覽』）

ちちぶーこうせん 秩父孝仙

明治七年（一八七四）ー昭和十三年（一九三八）

秋田県山本郡盛沢寺十九世、北秋田市宝勝

寺三十二世。号は大道。明治七年九月十二

日に秋田県能代市柳町の秩父重教の次男に生まれ、幼時に北村亮仙の養子となる。本師は北村亮仙。明治二十三年に東京府曹洞宗支校を卒業し、二十七年まで東京市総泉寺の木下吟童会下に安居。その間葛蔭北仙に参随し、総泉寺の丸田大峯の常恒会で立職し、盛沢寺の北村亮仙の室に入って嗣法した。教区長、民生委員などを務め、石川素童の總持寺移東の実現に助力した。昭和十三年四月二日に六十五歳で示寂した。

ちばーかいりん 千葉戒林

ー明治十七年（一八八四）

いすみ市勢国寺、市原市龍昌寺、いすみ市真常寺。号は随翁。本師は勢国寺二十八世の聚山量海。明治十六年に千葉県長の教導職副取締として廃寺となっていた千葉県長生の光福寺の本堂屋根替などを行い、大般若法会を再興するなどして回復に尽力した。能筆家で勢国寺に書風の石碑がある。明治十七年三月十六日に示寂した。（『明教新誌』第一四七四号）

ちばーしょういち 千葉省一

明治三十三年（一九〇〇）ー昭和六十三年（一九八八）

気仙沼市峰仙寺。明治三十三年十月十四日に宮城県本吉郡御嶽村に生まれる。本師は千葉禅山。昭和二年（一九二七）に曹洞宗大学を卒業し、愛知中学校舎監、曹洞宗布教師、軍人布教師を務め、中国の吉林市日満寺を開設し、吉林省教化興亜禅林、九台布教所設立、磐石県禅宗寺を設立するなど、南滿鉄道巡回布教師、宗議會議員、郡連合青年団長、満州国文教部中央教化委員、吉林省地方教化委員、警務司練成委員、吉林市本部委員、鉄道総局嘱託、協和会吉林省本部委員、本吉町長なども務めた。昭和六十三年十月十八日に八十八歳で示寂した。

ちばーたつせん 千葉達仙

天保十四年（一八四三）ー大正十三年（一九二四）

大崎市円通院三十世、大崎市祥雲寺十八世。号は雲嶺。仙台市宮城野区茂庭の千葉

家に生まれる。明治末期に洪水による寺地の移転を実施している。大正十三年八月二十二日に八十一歳で示寂した。

ちばーぶんざん 千葉文山

一 明治三十九年(一九〇六)

大船渡市洞雲寺二十世。号は道光。大船渡市盛町の千葉武左エ門、ツルの九男として生まれた。受業師、本師は玉光璘山。明治十年曹洞宗大学林中退、曹洞宗同志会員で、能登から鶴見への總持寺移転の際に責任者を務めたが、明治三十九年四月九日に四十九歳で示寂した。

ちよだーらいおん 千代田雷音

文久二年(一八六二)一 昭和四年(一九

二九)

羽生市祥雲寺十九世、加須市医王寺十五世、太田市玉巖寺三十二世。号は黙如。埼玉県大井村で生まれる。受業師、本師は東松山市光福寺の泰禪。群馬県にて教会々頭寺院総代議員、教区長、埼玉県にて布教師委員長、布教師、埼玉県自彊会支部長を務

めた。大正十四年六月に、門下生によって顕彰碑が祥雲寺に建てられている。昭和四年八月九日に六十九歳で示寂した。

ぬ

ぬかりやーかいてん 忽滑谷快天

慶応二年(一八六六)一 昭和九年(一九

三四)

川越市蓮光寺二十五世。号は仏山。戸籍では慶応三年十二月一日生まれとあるが、事実は二年である。誕生地については二説ある。一は、埼玉県入間郡南古谷村。二は東京府北多摩郡東村山村久米川で、遠藤太郎左衛門の四男に生まれる。受業師は忽滑谷亮童、本師は仲亮快。明治十七年(一八八四)に東京市麻布の曹洞宗大学林に入学し、二十年三月に卒業する。明治二十一年一月に神田淡路町の共立学校に入学し、七月に本科第二級修業、九月に東京第一高等中学校に入学、二十三年六月には予科第二

級を修業し、七月に貸費宗学生に選出される。同二十四年一月には慶応義塾大学文学科に入学し、二十六年十二月に卒業する。

二十七年二月に東京曹洞宗中学校教授に就任し、二十九年三月に辞任した。二十八年八月に蓮光寺の住職になり、二十九年三月には東京曹洞宗高等中学校教授になっている。三十三年には日置黙仙に随行し暹羅へ仏骨を奉迎に行く。三十四年には曹洞宗特選議員に選任され、同年九月に曹洞宗高等中学校監理兼教授に任ぜられ、翌年九月には辞任した。三十六年九月から四十四年八月まで曹洞宗大学林英語講師を嘱託せられ、慶応義塾、青山学院、京都同志社などの講師も務めた。大正八年(一九一九)十一月に曹洞宗大学教頭、十年三月に曹洞宗大学学長に就任した。大正十四年三月には駒沢大学学長に就任しており、著作は『禅学批判論』『怪傑マホメット』『禅学講話』『禅の妙味』『批判解説禅学新論』『鍊心修道參禅道話』『達磨と陽明』『清新禅話』『和漢名士參禅集』『楽天生活の妙味』『宇宙美観』『達人達観』『禅家龜鑑講話』『曹

洞宗意私見』『禅の理想と新人生の曙光』

『無尽蔵』『禅学思想史』『鍊心術』『正信問答』『普勸坐禅儀講話』『典座教訓抄講話』

『日日の信仰と工夫』『朝鮮仏教史』『信仰を基礎としたる農村振興の實際的指導』

『随喜称名成仏決義三昧儀抄講話』などがあり、英語に達者であった。昭和九年三月に学長を辞任し、七月十一日に講演後、六十八歳で示寂した。(『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『曹洞宗現勢要覧』『禅学大辞典』)

ぬのむらゝばいあん 布村梅庵
一 昭和三十二年(一九五七)
丹波市瑞光寺十二世、福井市大乘院三世。号は雪岑。富山県婦負郡四方町に生まれる。受業師、本師は田中仏心。永平寺、吉峰寺で修行。昭和三十二年二月二十八日に八十歳で示寂した。

ぬまざきーぜんこう 沼崎全光
一 大正九年(一九二〇)
流山市春山寺二十一世、松戸市金谷寺二十

世。号は太龍。茨城県守谷町に生まれる。

受業師、本師は大屋普山。東京都駒込の吉祥寺に安居した。金谷寺では寺子屋を始め多くの門下生を輩出した。大正九年七月十七日に六十九歳で示寂している。

ぬまたりようぎ 沼田亮義
明治二十七年(一八九四)一昭和五十六年(一九八二)
長野市如法寺三十三世。号は大安。明治二十七年五月一日に長野県飯山市照里で沼田文治郎の二男として生まれる。受業師、本師は西沢了聞。世田谷中学を卒業後、大正八年(一八一九)に曹洞宗大学林を卒業する。長崎の三菱鉱業高嶋炭坑布教師、地方改良布教師、宗務所長、宗会議員、特選議員、長野県仏教会副会長、上高井郡仏教会長、長野県遺族会理事、長野市老人クラブ連合会長、長野県保護司会理事、村会議員、郡公民館長連合副会長などを務め、昭和二十六年には村長に就いた。總持寺顧問にもなり、昭和五十六年一月十五日に八十六歳で示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』『洞

門龍象要覧』『現代仏教を知る大事典』)

ね

ねまつーぜんきょう 根松全鏡
一 昭和二年(一九二七)
秩父市東昌院十九世、熊谷市高雲寺。号は破山。昭和二年六月二十八日に七十五歳で示寂した。

ねまつーふくどう 根松福童
一 昭和二十三年(一九四八)
埼玉県比企郡東昌寺二十二世。号は知黙。明治四十二年(一九〇九)埼玉県比企郡小川町の養昌寺より東昌寺へ転住する。しかし、翌四十三年四月三日には堂宇を悉く焼失した。埼玉県第六曹洞宗務所長として尽した。大正八年(一九一九)八月に深谷市矢島の慶福寺へ転住しており、昭和二十三年四月一日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

ねもとーしょうほう 根本正邦

明治十六年(一八八三)ー昭和二十八年(一九五三)

真岡市海潮寺二十九世。号は大塚。明治十六年十月二十八日に栃木県芳賀郡真岡町の横田茂八郎の三男に生まれる。受業師は根本梅谷、本師は石川素童。明治三十年(一八九七)より大隈重信の書生となり、三十四年十二月まで早稲田大学の前進の塾に学び中退する。方面委員、民生委員、保護司など社会事業に功績があり、栃木県仏教会長を務めた。従軍布教師、両本山特派布教師を拝命しており、犯罪者の更生を図るため芳賀四恩会を創設した。昭和二十八年八月十四日に示寂した。(『曹洞宗現勢要覧』)

ねもとーばいこく 根本梅谷

文政十一年(一八二八)ー明治三十七年(一九〇四)

真岡市海潮寺二十八世、栃木県芳賀郡昌泉寺二十八世。号は壽山。文政十一年十一月二十三日に茨城県北相馬郡守谷町に生まれる。受業師はつくばみらい市の高雲寺の義

文、本師は海潮寺二十七世の観山賢牛。天保十五年(一八四四)より三カ年間、金沢市の天徳院に安居し、黙笑に参随した。嘉永五年(一八五二)より總持寺に安居している。明治三十七年五月十一日に示寂した。

ら

らくーせいちよう 楽清昶

ー明治三十年(一八九七)

出雲市十楽寺二十一世、出雲市福知寺六世、出雲市大円寺十世。号は痴絶。島根県簸川郡佐田町に生まれる。受業師、本師は祖雲秀苗。明治三十年十二月十八日に五十歳で示寂した。

らげつーしょうがん 羅月照巖

ー大正十一年(一九二二)

大田市浄土寺十八世、鳥取県西伯郡正福寺。羽咋市豊財院。号は大光。本師は宇佐

市門福寺十二世の戒本孝全。明治三十九年四月に永平寺の維那補より維那に就いた。当時の評として「末路甚だ萎靡せしも親化

随行に於ける維那として美音の持主」(粟山泰音「奕堂門下の高足逸材」(『中央仏教』第九巻第一号)といわれている。四十年七月には御代香師に転任された。『總持奕堂禪師遺稿』の編者で、大正十一年六月九日に豊財院で示寂した。(『梅屋奕堂禪師語録』解題)

り

りくーえつがん 陸鉞巖

安政二年(一八五五)ー昭和十二年(一九三七)

名古屋市円通寺二十八世、鳥取市景福寺四十一世、関市東漸寺十二世、関市満願寺十九世、磐田市東昌寺開山、御前崎市清岩院開山、岐阜市龍雲寺二十一世。号は仙雄。安政二年二月八日に名古屋市に生まれる。

受業師は名古屋市千種区桃巖寺の僊玉、本師は本渡市東向寺の信叟仙受。明治九年より能仁柏巖に教相を、佐藤牧山に和漢学を学び、十九年に曹洞宗大学林を卒業して研究生に特選され、翌二十年より二十三年まで哲学館に在学する。十八年九月に曹洞宗大学林寮監、二十三年十一月より曹洞宗東京中学林教授、三十年五月より三十三年九月まで曹洞宗台湾布教師を務め、その間に印度、タイ、ビルマ、セイロン、中国へ宗教授察に行っている。三十三年九月には曹洞宗大学林総監、三十四年七月には曹洞宗議會特撰議員に任命され、永平寺出張所副監院及び監査部長なども拝命し、大正八年には朝鮮、満州、支那へ、昭和二年には欧米の宗教視察に行っており、両本山布教師としても各地を巡回した。著書には『陸禪話』『心経破草鞋』『漢訳修証義』『光明藏三昧布鼓』『伝光録布鼓』『正法眼藏布鼓』『正法眼藏随聞記布鼓』『建撕記布鼓』『禪戒鈔布鼓』『正法眼藏随知津布鼓』『修証義筌蹄布鼓』『修道用心偈六百首布鼓』『正法眼藏摘旨韻文布鼓』『西船行脚布鼓』『撥草

初門布鼓』『縮被指針布鼓』『伝道歌布鼓』など多くの著書、論文がある。昭和十二年二月二十四日に八十二歳で示寂した。〔洞上高僧月旦』『曹洞宗名鑑』『現代仏教家人名辞典』『円通寺銅像碑文)〕

りふーしんどう 利府真道

明治十九年(一八八六)ー昭和三十五年(一九一〇)

奥州市金性寺、奥州市自徳寺二十六世。号は大観。明治十九年七月二十一日に江刺市米里字荒田表の利府芳山の二男に生まれる。受業師、本師は利府芳山。曹洞宗大学林を卒業後、永平寺と總持寺に安居した。米里農協理事長、米里村会議員、岩手県曹洞宗第三宗務所長、第二中学林寮監などを務め、曹洞宗地方布教部布教師として令名があった。昭和三十五年十一月一日に七十四歳で示寂した。〔現代仏教家人名辞典)〕

りふーほうざん 利府芳山

嘉永五年(一八五二)ー大正十一年(一九二二)

奥州市自徳寺二十五世。号は岳應。嘉永五年一月十日に水沢市寺小路の利府左京の三男に生まれる。受業師、本師は利府天山。明治六年に上京し、目黒瀧泉寺不動において天台学を修め、九年には駒込の梅檀寮に入り、三年級を修了する。十六年に権少講義に補任せられ、県下の布教に従事する。岩手県宗務支局副取締、会計事務を司る。管内布教部委員長などを務め、布教興学に尽力せられた。大正十一年十一月二十二日に七十歳で示寂した。〔曹洞宗名鑑』『過去帳)〕

りゆうーそくてん 龍桑巖

明治四十二年(一九〇九)

名古屋市安栄寺十二世、北名古屋市平田寺十九世、名古屋市大光院三十二世。号は蘆洲。受業師は四溟騰水、本師は一道貫之。明治四十二年九月二十一日に示寂した。〔平田寺歴住記録)〕

りゆうーどうち 劉道智

安政五年(一八五八)ー昭和二年(一九

二七)

鳥取市森福寺十八世、鳥取市西光寺七世、富良野市洞源寺二世。号は一機。安政五年十二月十二日に伯耆国東伯郡長瀬村の劉恒右衛門の子に生まれる。受業師、本師は酒井普明。十四歳の時、森本歎一、湯本文彦などについて皇漢の学を研修する。十八歳の冬、宇治市興聖寺の平川肯菴に謁し、続いて長善玄朗、大溪雪巖に歴参すること九年で、詩傷も学んだ。久我環溪、信叟仙受にも参学している。後に哲学館を卒業し、准師家、管内布教師などを務める。昭和二年十月二十五日に示寂した。(『現代仏教家人名辞典』)

ろ

ろざんーたいじょう 廬山泰成

ー明治三十四年(一九〇一)

萩市大蘊寺、長門市大寧寺四十五世、豊川市玉林寺二世。号は簀運。廬山と称したの

は、大寧寺が古来、東廬山と別称されていることによる。鳥取県に生まれる。本師は鉄雄諦閑。禅海靈龍、福山黙童に参随する。文久三年(一八六三)の「七卿落ち」

「豊川いなり物語」岩田啓靖『大寧寺ものがたり』

で長州に逃れていた三条実美ら公卿を一時大寧寺へ滞留潜居させた。また、明治維新戦争の終結後に起きた奇兵隊を始めとする諸隊の紛争に対し、藩庁の脱隊諸兵に対する処遇の不当なことを見るにしのびず、儒者富永有隣、大楽源太郎、洞玄寺住職の実音らとともに、時の藩庁に抵抗したことで追われる身となる。そこで、三河の妙巖寺に難を避けた。明治政府の神仏分離政策で豊川稲荷を抱える妙巖寺は法難に直面したが、泰成は三条実美に直訴して説得し、門前に建つ一鳥居のみの撤去で終った。明治三十四年まで妙巖寺のために力を尽くしており、その因縁により、後に大寧寺へ「長門豊川稲荷」として分祠されることとなった。十三年に豊川市玉林寺二世に晋住し、三十四年三月十三日に玉林寺において九十一歳で示寂した。(大庭龍徳『増補曹洞宗瑞雲山大寧護国禅寺略史』安井四郎『実録